



薬谷 礼子

Yakutani Reiko

イブ
ちゃん
の
魔法まほう

「お母さん。あのお人形さわっていい？」

「すみません。その水色の服を着た赤ちゃんのお人形、見せていただけますか？」

お母さんがお願いすると、オモチャ売り場の店員さんが、棚にすわっている人形をそつとだきあげて、おろしてくれました。そして、

「どうぞ」

と言つて、真央ちゃんにわたしてくれました。

真央ちゃんのお母さんは、中学校の先生をしていて、今日は早く帰つて来たので、いっしよに、上町スーパーに買い物に来ていたのです。

その人形は、頭から足の先までの、つなぎの服を着ていて、服の色は、真央ちゃんの大好きな水色です。

本物の赤ちゃんみたいに、ふつくらした手足、ほほはピンク色、目がとつても大きくて、ねかせると、長いまつげを下におろして目をつむります。小さな口元は、今にもかわいい声で、真央ちゃんに話しかけそうです。おすわりもできます。だくと、真央ちゃんの胸にすつぽり入る大きさです。

真央ちゃんは、（私の家にこんなかわいい赤ちゃんがいたらいいな、私の妹にしたいな）そんなことを思っていると、その人形がほしくてたまらなくなってきました。

でも、オモチャを買ってもらえるのは、たんじょうびだけなので、お母さんに「買って」と言えなくて、がまんしていました。

真央まおちゃんは、その日から毎日、人形に会いたくて、学校から帰ったら、かばんをげんかんにおいたままで、一人で上町スーうえまちパーに走って行きました。

店員さんは、そんな真央ちゃんに、いつも、大好きな人形をだかせてくれました。

真央ちゃんは、良いことを思いつきました。

そう、もうじきクリスマスなんです。

(サンタさんにお願いしよう)

真央ちゃんは、さっそく手紙を書きました。

——サンタクロースさま。

とつても寒くなりました。お元気ですか。

私は今年ことし、小学三年生になりました。

今年も、もうすぐクリスマスがやってきます。クリスマスのプレゼント

トには、上町スーパーの二階にかいの、オモチャ売り場に売っている、あの

水色の服を着たお人形がほしいです。

よろしくおねがいます。

真央より――

手紙をビニールの袋に入れて、テラスのレモンの木に、くくりつけました。

真央ちゃんは、字が書けるようになった一年生の時から、クリスマスが近づいたら、（サ
ンタさん何時^{いつ}来てくれるかな？ 早く手紙に気がついてくれたらいいな）と思いながら、
毎年、こうしてくくりつけているのです。

テラスから見える向かいの家の、古い大きなイチヨウの木が金色に色づいて、シャンデ
リアのように輝^{かがや}いて、冷たい風にゆれていました。

次の朝、真央ちゃんが目をさまして、テラスに出ると、レモンの木には、真央ちゃんの
手紙がなくて、サンタさんから手紙が届^{とど}いていました。

「お母さんお母さん！ 昨日、真央ちゃんがお手紙出したら、もう、サンタさん、取りに
来てくれたよ。お返事がほら！」

真央ちゃんが、キツチンにかけこんできました。

『真央ちゃんへ。』

私は冬が大好きなので、元気ですよ。日本のお友だちに、クリスマスイブの日に、ブレ

ゼントをとどけなくてはならないので、今は、そのじゅんびでおおわらわです。真央ちゃん
のほしいプレゼント、わかったよ。楽しみにまっけてください。サンタクロスより」
て書いてる」

「よかったね。クリスマスが楽しみね。今夜は、クリスマスツリーをかざりましょうね」

次の日、真央ちゃんは、学校から帰ったらすぐ、庭のそこから、クリスマスツリーを
だしてきました。

去年は、真央ちゃんの背より少し高かったツリーですが、今年ことしは、大きくなった真央ちゃん
の身長と、同じくらいの高さになっていました。

小さなサンタさんや、とないがひくソリや、大小の星や、赤と金色と銀色の丸い玉、
そして、プレゼントのリボンがついた小さな箱はこなどを、一つ一つかざっていききました。

小さなかざり電球でんきゅうがついたコードを、ツリーにかけてから、雪が積つもったように、まっ
白なわたを、ツリーのあちこちにくつつけて、出来上がりです。

コードのはしをコンセントに差し込むと、星が、空から一度におりてきたように、ツリー
が、まぶしい光につつまれました。

「わあ！ きれいな！ ランランランランラン鈴がーなる」

真央ちゃんは、ツリーのまわりを、スキップしながら歌いました。

そして、ツリーのでっぺんの大きな星のそばに、サンタさんからの手紙をつるしました。

待ちに待った十二月二十四日、クリスマスイブの日がやってきました。

ふろから上がってから、パジャマにきがえて、ふとんに入った真央ちゃんでしたが、なかなかねむれません。

そつとふとんから出て、窓の外をのぞいてみました。

雪が音もなく降^ふって、あたりを明るく^まらしてしまいました。

(きつと、サンタさんをむかえる雪なんだ)

「窓を開けていたらかぜをひきますよ。早くおやすみなさい。真央ちゃんがおきていたら、サンタさん来ないかもしれないわよ」

お母さんにそう言われて、

(そうだ、サンタさんは、ねむっている間に来るんだわ)

真央ちゃんは、急^{いそ}いで窓をしめて、ふとんに入りました。

サンタさんにたのんだ、あの水色の服を着た人形のことを思って、うつらうつらしている内に、ねむってしまいました。

真央まおちゃんは、朝、目をさますと、パジャマのままテラスにとんでいきました。

テラスは、雪で真っ白におおわれて、朝日あさひをまぶしくはね返かえしていました。

雪が積つもつていないひさしの下には、真っ赤なりボンで結むすばれたピンク色の箱が、真央ちゃんをまつていました。

「わーい。サンタさんのプレゼント！」

真央ちゃんはその箱を、朝ごはんのしたくをしているお母さんに見せにいきました。

「開けていい？」

お母さんが、「いいよ」と言う間もなく、もうりボンをほどいている真央ちゃんでした。中には、なんと、サンタさんをお願いしていたあの人形が入っていました。

「お母さん！ サンタさんが、あの上町うえまちスパーで見えた水色の服を着た赤ちゃんの人形と同じ人形を、下さったよ。ほら！ ほら見て！ 見て！」

「よかったね」

お母さんは、真央ちゃんよろこぶ顔を見て、やさしくほほえみました。

真央ちゃんは、クリスマススイブにサンタさんからいただいた人形なので、「イブ」という名前をつけました。

人形のくつ下のうらがわに、細い黒のマジックペンで「イブ」と、小さく書きました。

真央ちゃんは、さっそく、サンタさんに手紙を書きました。

——サンタクロースさま。

お人形ありがとうございました。大切にします。私の妹にします。

名前をイブちゃんにしました。

真央より——

そして、レモンの木にくくりつけました。

真央ちゃんはその日から、イブちゃんが待っているの、学校が終わったら急いで家に帰ってきます。

お母さんが仕事しごとから帰ってくるまで、イブちゃんと話したり、だいてあげたり、おぶつたり、さんぼしたり、絵本を読んであげたり、こもりうたを歌って、ねかせたりして、あそびました。

クリスマスがすぎて、新しい年が始まって、春休みが近づいたある日の夜のことです。
「ごめんください。夜遅よるおそくごめんなさい」

「どなたかしら？ はい」

お母さんがげんかんに出てみると、小さな女の子の手をひいて、おばさんが立っていました。

「まあ、金田奈美さんのお母さん。どうされたのですか？ 奈美さんの妹さん？ よくきたね。お名前なんていうの？」

女の子は、ちよつとはずかしそうに、

「ゆりちゃん」

と、小さな声で言いました。

「先日三歳さんじゅっさいになったばかりなんですよ」

「そうなんですか。どうぞお上がり下さい」

お母さんがそう言うと、おばさんは、なんだかしんみりような顔をして、ゆりちゃんといっしよに、ざしきにあがってきました。

おばさんは、真央まおちゃんのおかあさんが教えている、受け持ちのクラスの生徒の、お母さんでした。

二人は、長い間むつかしそうな話をしていました。

そのうちに、おばさんの横にすわって、おとなしくしていたゆりちゃんが、立ち上がって、

「お母ちゃんもう帰ろうよ。ねえ！」

とおばさんの手をひっぱりました。

「ゆりちゃん。もう少し話があるからまってね」

「いやっ！ 帰る！」

ねむそうに目をこすりながら、半分泣きだしそうになりました。

「おりこうだから、もうちよつとまって」

「いやあー」

ゆりちゃんが泣き出したので、

「真央ちゃん！ ちよつと！」

お母さんが、となりの部屋であそんでいた真央ちゃんを呼びました。

「はーい。なにに？」

真央ちゃんが、イブちゃんをつれて、お母さんの所に行くと、

「そのお人形、かしてあげて」

「えっ！」

「ゆりちゃんがたいくつしているみたいなの。オモチャもないし」

「はい」